

2013

広報

おばま 5



《表紙》

伸びゆく西部を作る会による桜まつりが小浜公園で開催され、子どもたちが輪投げ大会や宝探しを楽しみました。

伸びゆく西部を作る会は、地域の活性化を目的に、小浜地区西部9区の区長会を中心に構成されており、今年は桜まつりに合わせて公園内の清掃活動も実施しました。

(4月14日)

【特集】 いま、環境を守るためにできること

なぜ今、自然再生が必要なの？

かつてはその土地で見られた生き物の多くが絶滅の危機に直面しています。多様な生き物が暮らす自然環境を、私たちの手で守り育み、後世に残していきましょう。



外来種の脅威が迫っています

国外から持ち込まれた「外来種」が、もともとその土地にいた生き物の生態系を乱しています。人間活動の拡大による都市化や温暖化が原因の環境破壊も進んでいます。



誰でもできる自然再生への取り組み

自然再生はどこでも、誰にでもできる取り組みです。小浜でも多くの団体や学校が活動しています。地域の生き物など環境がどうなっているか、知ることからはじめましょう。



聞こえますか？生き物たちのSOS



いま、環境を守るためにできること

この地球では、人とともにさまざまな動物や植物が暮らしています。共に手を取り合って生きるための道をみんなで考えていきましょう。

■問い合わせ 環境衛生課 ☎内線 142



福井県立大学海洋生物資源学部 准教授 田原 大輔さん(42歳・一番町)

最近、小浜にも外来種が増えて、地域が独自の生態系を失いつつあります。外から入って来た生き物をすべて駆除するのは難しいですが、外来種が生態系にとって危険という認識を持つことが、次に同じことを起こさないためにも大切です。海外からの外来種は知られるようになりましたが、国内でもある地域にしかないはずの魚が人の手によって全国にバラまかれ、生態系を乱すという「国内外来種」問題が起きています。まずは、自分が住む地域に、どんな生き物がいたのかを過去も含めて調査して、知ることが大事です。何が在来種で外来種なのか、見分けることが必要なので、分からなければ、行政や研究機関に聞いて、正しい知識を広めましょう。



かつて日本を彩った美しい小川や田んぼ、そこで暮らす生き物(動物や植物)など、自然の数々。見た目は同じでも、環境の破壊は確実に私たちのまわりに広がっています。特に、人間の手ににより、国外から持ち込まれた生き物が、日本固有の在来種を捕食・侵略するという外来種問題は国内各地で起こり、その地域の生態系バランスや「生物多様性」に多大なる悪影響を与えています。生物多様性とは、さまざまな環境があり、いろいろな生き物がいること。そして、それぞれの種の中でも個体の違いがあることを言います。この生物多様性により、多くの生き物がつながりあうことで、その土地の水や緑が生まれ、その地域固有の文化が育まれています。近年は過去の反省を踏まえて、各地域で、もう一度その土地の自然を、あるべき姿に戻そうという活動が広がっています。未来を担う子どもたちが、その土地の生き物に寄り添いながら生きていけるように、私たちの手で自然環境を守っていきましょう。



上段/ブラックバス※オオクチバス(左右とも)は小浜でも急速に増殖中
下段/オオキンケイギク(左) アライグマ(右)すべて特定外来生物



セイトカアワダチソウの初夏の群生の様子(上)
アメリカザリガニの食害を受けて荒れ果てた沼(下)

「こちからも要チェック」「要注意外来生物」

要注意外来生物とは、法律の規制はないが、外来種の間でも、在来種への悪影響があるものです。ほかにも問題となっている外来種は多数います

タイリクバラタナゴ

- 中国原産で、昭和17年に国内に入り、ペットや放流で分布拡大
- 市内でも池や沼、水路、河川などで確認
- 在来タナゴ類を駆逐し、日本産は各地で絶滅

アカミミガメ

- 北アメリカ原産で、昭和34年頃にペットとして国内に入る
- 市内でも河川などで確認
- 小さいときは緑色で、大きくなると耳付近が赤くなる
- 在来のカメの餌や生息場所を奪い駆逐する

セイトカアワダチソウ

- 北アメリカ原産で、明治時代に鑑賞植物として国内に入る
- 乾燥地から湿地まで、在来植物を押しつけて生える
- 背の高さと黄色い花が特徴。開花期は10〜11月

アメリカザリガニ

- 南アメリカ原産で、昭和2年頃に国内に入る
- 市内でも池や沼、水路、河川などで確認
- 水草やオタマジャクシ、水生昆虫など何でも食べて、その土地の生態系を乱す

わたしたち 実は、外来種は、あなたのすぐ隣まで来ているんです

かなり注意！「特定外来生物」

特定外来生物とは、外来種の間でも、生態系、人の生命、農林水産業に対して、特に大きな被害をおよぼすもので、法律により規制されています



若狭総合公園ため池でのブラックバス捕獲作業(上)
池から見つかった大量のブラックバス(下)

ブラックバス(オオクチバス・コクチバス)

- 北アメリカ東部原産で、大正14年に国内に入る
- 市内では若狭総合公園(北塩屋)のため池などで確認
- オオクチバスは口が大変大きく、背びれの真ん中にへこみ、体の横に黒い斑点が並ぶ列がある
- 魚、エビ、虫、ネズミなど動物ならなんでも食べる
- コクチバスは県内ではまだ一部で確認されるにとどまっているが、低い水温でも生息できるため、注意が必要

アライグマ

- 北アメリカ原産で、昭和37年に野外に逃走したものが定着
- 市内でも山間部を中心に確認
- 目と鼻の黒い模様と、尾にある7本程度のしま模様の特徴
- 農作物被害や、建物の天井への侵入、在来の生き物を食べる被害などが発生

オオキンケイギク

- 北アメリカ原産で、明治13年頃に国内に入る
- 高さ30〜70cmになる多年草。繁殖力が強く在来種に悪影響



上段/アカミミガメ(左)とタイリクバラタナゴ(右)
下段/アメリカザリガニ(左)とセイトカアワダチソウ(右)
すべて要注意外来生物





若狭・里海探検隊

生態系の記録と地元の海の魅力を広めることを目的に、小浜水産高校が福井県立大学と連携して、平成23年4月から、砂浜海岸の生物を調査。同高のダイビングクラブを中心に、大学生や市民も参加して、西津浜の魚類・小型無脊椎動物の生息状況を年4回調査しています。



小浜湾の砂浜にいる生物を調査

どの季節に何がいて、1年を通して個体数や体長などがどう変化するかを調べています。
エビやハゼなど、砂浜にはエサになる小さな生物が多く、調査を通して、生物生産の基本を知ることができます。この世界に意味のない生物はいません。いるからには何らかの役割を持っているんだと思います。

小浜水産高校ダイビングクラブ
キャプテン 畑田 勇也 さん(18歳・高浜町和田)

アマモサポーターズ

「小浜湾を魚あふれる豊かな海に！」を合言葉に、市民を中心に、平成17年に設立。小浜湾から激減した海草・アマモを再生させるために、小浜水産高校とともに環境回復に向けた取り組みを続けています。また、海浜清掃や子どもたちへの啓発活動など、自然を生かした地域づくりに向けたネットワーク構築も行っています。



小浜の海に潜ってアマモを調査

陸上からはなかなかわかりませんが、浄化作用のあるアマモが育つ環境が小浜の海から消えつつあります。
活動を通して、海や自然が昔のままではなくなっていることを、多くの人に知ってほしいです。そして、みんなで改善策を考えることによって、地域の宝物であるきれいな海を守っていきたいです。



アマモサポーターズ
代表 西野 ひかる さん(51歳・水取1丁目)



コウノトリの郷づくり推進会

国富地区が国内最後のコウノトリの営巣地であった歴史を生かし、豊かな自然を次世代に残そうと、地域住民が平成23年に結成。専門家の協力を得ながら、地域の休耕田をビオトープに整備するなど環境保全に取り組んでいます。その活動が実り、4月7日に3年ぶりにコウノトリが国富地区に飛来しました。



ビオトープを整備(左) 飛来したコウノトリ(右)

コウノトリがいつ飛んでくるかわからない中での活動に、不安もありましたが、心をこめて活動していれば、いつかは来てくれると信じていました。コウノトリは餌を1日400～500羽食べると言われているので、ビオトープや水田のように、生き物がたくさんいる餌場を作ることが大切です。お金ありきでやるのではなく、自然いっぱいの国富を守るためみんなで活動しています。

コウノトリの郷づくり推進会
会長 宮川 健三 さん
(77歳・栗田)



宮川地区の生き物を知る機会はありませんでした。調査ができて良かったです。色々な生き物がいることを知りました。生きているでっかいナマズを初めて見ました。みんなで、「ナマタロウ」「ナマジロウ」と、名前をつけました。また、今年も調査するのが楽しみです。

宮川小学校
4・5・6年生の皆さん



宮川小学校

宮川小学校では、毎年、郷土の自然や環境について学ぶ活動の一環として、地区住民で作る環境保全組織「宮川グリーンネット」や県の協力を得て、夏休みに「水中生物しらべ」を実施しています。昨年も多くの児童が参加し、学校の前を流れる野木川で、地域の自然環境の変化や、生き物との関わり方を学びました。



地域の生き物を調査する児童たち